

Y24a 低頻度大規模災害としての宇宙由来イベントの学際的研究への予備的調査

玉澤春史（京都大学/京都市立芸術大学）

宇宙天気現象やプラネタリーディフェンスは、天文現象であると同時に、「低頻度大規模災害（Low Probability High Consequences (LPHC) disaster）」としての側面も持つ。LPHC に対しての防災の観点からのアプローチは、特に 2021 年以降、地震や津波、関連して火山などの分野で積極的に議論されるようになったが、宇宙由来のものに対しては防災の側面での議論は 2022 年の総務省による宇宙天気報告書などこれからという状況である。一方、上記に挙げた二点は欧州や米国などではスペースデブリ問題と一緒に宇宙状況把握（SSA）という防衛問題として位置づけられる場合もある。また、人類の生存にかかわるといことでこのような宇宙由来イベントはしばしば環境教育などの観点から教材のモチーフとして取り込まれることもある。低頻度ゆえの実感のなさが実際の問題として議論しようとする際に判断が難しくなっていたり、十分な学際的事前検討が行われていない可能性がある。2022 年に選択の困難な様々な問題について社会調査を行う例の一つとして惑星防衛を取り上げ、学歴による判断の変化の傾向が見受けられたが、回答者がどの程度実際の問題として取り組んだかをより明らかにするためには周辺状況を把握したうえでの調査分析が必要である。本発表では先行調査結果にも触れながら防災として宇宙災害研究を扱うための状況整理を試みる。